

* *

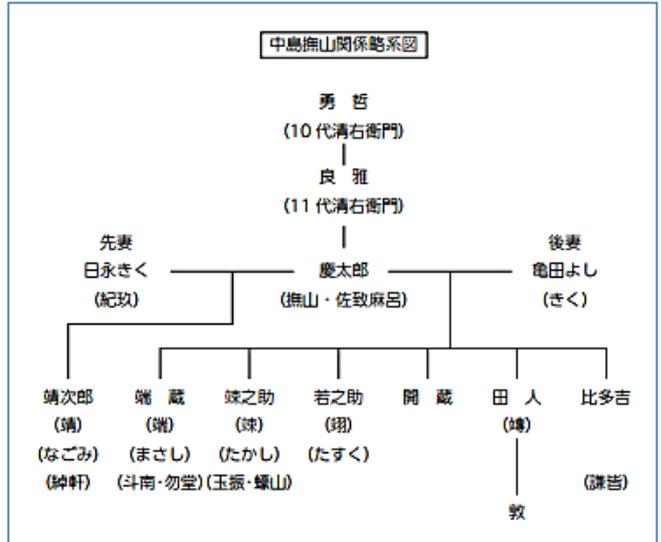
教育の街・久喜、そして遷善館！

●歴史、文化、そして自然を堪能した旅、その3！
久喜の旅の途中ですが、中島撫山の略系図を久喜市教育委員会発行の「中島撫山の生涯」から見ると下記の通りです。

◆江戸時代の教育機関：藩校・郷学・私塾・寺子屋

- 藩校**は、藩が設立した、いわば公立学校で、入学資格は藩の武士階級の子弟です。自藩の有能な人材を育成しようと、また武士の教養程度を挙げようと、藩校を設けました。藩校では「文武兼備」を掲げ、7～8歳で入学して第一に文を習い、後に武芸を学び、14～15歳から20歳くらいで卒業する。教育内容は、四書五経の素読と習字を中心として、江戸後期には蘭学や、武芸として剣術・槍術・柔術・射術・砲術・馬術などが加わった。代表的な藩校としては、会津藩の日新館、米沢藩の興讓館、水戸藩の弘道館、長州藩の明倫館、中津藩の進脩館、佐賀藩の弘道館、熊本藩の藩校時習館、鹿児島藩（薩摩藩）の造士館などが有名である。
- 郷学**は、半公立学校とも言え、藩校に準じて、藩が認めているもので、入学者は武士や一般庶民で、藩が設立する場合と、庶民や武士が設立し、藩が認めるというような形が多いようである。
- 私塾**は、或る程度知名度のある知識人の先生の元に、教えを請う人がいて、自然発生的に学校のような形になったもので、基本的には、寺子屋と違って、成人が入学する私学です。「私塾」には、咸宜園（大分・廣瀬淡窓）、鳴滝塾（長崎・シーボルト）、松下村塾（山口・吉田松陰）、適塾（大阪・緒方洪庵）、洗心洞塾（大阪・大塩平八郎）、梅花塾（大阪・篠崎小竹）等があり、世に知られている。
- 寺子屋**は、ほぼ純粋に庶民の子弟の基礎教育に当たったもので、経営者や教授者は色々で、大体、現在の小学校・中学校が、民間で造られたというようなものである。これは、社会の発達に応じ、一般庶民も読み書き算数や、その他の色々な教養が必要になった為、需要ができて、それに応じて多数成立したものである。大体、6歳頃から12歳頃までの庶民の子弟が学んだ。江戸では「手習指南所」「手跡指南」などと呼ばれた。寺子屋の教育は「読み書き算盤」と呼ばれる基礎的な読み方・習字・算数の習得に始まり、さらに地理・人名・書簡の作成法など、実生活に必要なとされる知識や技術の教育が行われた。

旅の続きを綴ってまいりましょう。中島撫山の略系図を久喜市教育委員会発行の「中島撫山の生涯」から見ると下記の通りです。



この系図に出て来る中島敦の伯父・斗南も私塾の創設者の一人です。久喜市広報には…。

* *

★ 中島敦の小説『斗南（となん）先生』 ★

中島敦の小説『斗南先生』には、中島家の実在の人物が登場することや、「利根川べりの田舎」という表現で中島家の久喜新町宅が紹介されていること、そしてこの小説がほぼノンフィクションであることなどが、本市にとって意味のあるものとなっています。



▲斗南先生(中島端蔵)

斗南先生は、安政6年(1859)に中島撫山(ぶざん)の次男として江戸で生まれます。名前は端蔵たんぞう、名乗りはまさし斗南・勿堂(ぶつどう)は号です。敦も、小説の中で、「6歳で書を読み、13歳で漢詩漢文を能くした」と記し、「非常な秀才」「儒学的な俊才」と評するほどでした。

明治15年(1882)には、久喜本町宅に私立学校言揚学舎(げんようがくしゃ)を開いて舎主となりました。しかし、数年で弟の妹之助(しょうのすけ)に引き継いでしまいます。明治21年(1888)に政事小説『野路之村雨(のじのむらさめよ)』を著し、翌年に无邪志会(むさしかい)という政治団体を設立し、翌々年の第一回の衆議院議員選挙に立候補しますが、あえなく落選してしまいます。

その後、県会議員であった宮内翁助(おうすけ、中島撫山の弟子、後に衆議院議員となる)と意気投合し、明治26年(1893)に翁助と一緒に私立専門学校明倫館(めいりんかん)を設立して館長の職につきま。しかし、明治32年(1899)に館長の職を辞してしまいます。

明治 35 年（1902）に中国に渡り、久喜の地での目立った活動はこのころでほぼ終わり、昭和 5 年（1939）に病気で亡くなります。敦は、伯父・斗南先生の死によって、それまでの子どもじみた発想に気づかされ、冷静になって本当の自分の心を取り戻し、大人へと成長することができたのです。

皆さんも、ぜひ中島敦の小説『斗南先生』を読んで、市ゆかりの人物に思いをはせてみてください。問合せ 文化財保護課文化財・歴史資料係（菖蒲総合支所内／内線 370）【連載久喜歴史だより 第 65 回／久喜市広報平成 29 年 3 月 1 日より】

* *

「総合文化会館」、「武井家（自然環境保全地 1 号）」、「総合運動公園」、「なごみの湯」を巡って「久喜市役所」の裏を歩いて「久喜市公文書館」の前に次の碑がありました。

* *

★遷善館について★

「新建久喜遷善館記」碑は、亀田鵬斎の文並びに書により遷善館（せんぜんかん）の由来を刻んだ



碑で、文化五年（1808）に建てられた。

遷善館は久喜の主だった人々の強い要請を受けて代官の早川八郎左衛門正紀が幕府の許可を得て、享和三年（1803）に設立した郷学（武士のための藩学と一般庶民のための寺子屋の中間に位置する官民一体となった教育機関）である。早川八郎左衛門正紀（はやかわはちろうざえもんまさとし）は、享和元年久喜に赴任してきて善政を行った名代官である。

遷善館が設立された場所は久喜本町で、伝承によれば中央四丁目の愛生館病院のあたりであろうといわれている。造営費は村民の清兵衛（井上氏）が多くを負担したが、そのほかにも多くの人々が協力したといわれている。また、幕府も許可に際し敷地を与えるとともに、その年貢と夫役（土木工事などの労働課役）を免除して援助している。

遷善館の教育は、広く一般庶民を対象とする教諭日と町村の役人層の指定を対象とする経書講釈日とからなっていた。教育に当たった儒者は、亀田鵬斎・その子の綾瀬・大田錦城・久保築水らである。

「久喜遷善館記」碑は、明治十一年（1878）の大火で失われてしまったが、幸いなことにその拓本が残されていた。そこで、郷土の誇りである遷善館を後世に伝えるために、その拓本をもとに碑を復刻した。平成八年十一月吉日 久喜市教育委員会

* *

こうして教育の街・久喜の原点には、代官の**早川八郎左衛門正紀**がいます。

* *

★江戸時代の名代官 早川八郎左衛門正紀 ★

久喜市に「名代官」と称えられた代官がいたのをご存じでしょうか。江戸時代、久喜には米津（よねぎつ）氏が治める久喜藩がありましたが、寛政 10 年（1798）に出羽国（でわのくに）村山郡長瀬（ながとろ）（現山形県東根市）に領地替えとなります。その結果、久喜藩の領地は幕府領となり、享和元年（1801）には、当地の代官として早川正紀が着任しました。

早川は、通称を八郎左衛門といい 元文 4 年（1739）に笠間藩主 井上河内守（いのうえかわちのかみ）の家臣 和田市右衛門（わだいちうえもん）の次男として生まれ、のちに徳川御三卿の一つ 田安（たやす）徳川家の家臣早川正謙（まさのぶ）の養子となります。その後、明和 3 年（1766）、28 歳の時に早川宗家（そうけ）の早川正與（まさとも）の跡を継ぎ、幕臣となりました。



【早川八郎左衛門の像、真庭市】

天明元年（1781）43 歳の時に初めて代官に任じられ、出羽国尾花沢市（現山形県尾花沢市）5 万石を治めました。天明 7 年（1787）には美作国（みまさかのくに）、久世（現岡山県真庭市）に転任し備中国（びっちゅうのくに）笠岡（現岡山県笠岡市）も兼ねて 7 万石を治め、郷学（ごうがく）「典学館（てんがくかん）」・「敬業館（けいぎょうかん）」

を設立するなど、民衆教化に務めました。寛政 9 年（1797）には多くの功績が認められ、幕府から褒賞を授かっています。

享和元年 63 歳の時に武蔵国久喜 10 万石に転任となります。久喜では、享和 3 年（1803）に郷学「遷善館（せんぜんかん）」を設立するほか、利根川や荒川などの治水事業にも手腕を発揮しました。「名代官」と称えられた早川は、文化 5 年（1808）、病のため 70 歳で亡くなっています。現在、郷土資料館では、早川が晩年に記した「六教解」（明（みん）の洪武帝（こうぶてい）が民衆教化のために発布した教訓「六諭（りくゆ）」の解説書）を常設展示室で紹介しています。

問合せ文化財保護課文化財・歴史資料係（菖蒲総合支所内／内線 372）【連載久喜歴史だより 第 53 回／久喜市広報平成 28 年 3 月 1 日より】

* *

奥貫会長が選んでくださった「久喜市の教育の歴史」で、江戸時代から 200 年以上続く深いものがありました。感謝です。 <つづく>